防災
まちづくり
大賞 20 年

第 19 回受賞

# 災害を後世に伝えるために
## ～木碑プロジェクト～

岩手県大槌町　3.11 復興木碑設置プロジェクト
千葉科学大学　4 年　吉田　優作

## 1 木で残す意味

私は、故郷の岩手県大槌町で「3.11 復興木碑設置プロジェクト」を行っています。これは、震災の記憶を風化させないため、石碑ではなく、あえて腐ってしまう木で作った「木碑（もくひ）」というものを設置して、4 年に一度新しい木に換えることで震災の記憶を後世に残していこうとする活動です。

最初に木碑が完成したのが 2013 年 3 月 11 日。そこから 4 年経った昨年の 3 月 11 日、初めての木碑の交換を多くの方々と共に迎えることができました。この活動はこれからも続けていきたいと考えています。

私が木碑を建てようと考えたきっかけは、高校 1 年生の時に参加した中高生全国防災ミーティング（2012 年 12 月）でした。その中の討論会で、「震災遺構は残すべきなのか」というテーマで話し合いになりました。意見は賛成・反対の二つに割れ、最後までまとまらずに終わりました。けれど、その日から、「自分にできる震災を後世に残す方法があるのではないか」と考えるようになりました。そして、たくさんの人に意見を聞いてまわりました。

そうした中で、ある民俗研究家の方に、「木で残したらよいのではないか」と意見をいただきました。私はふと、町の公園の隅にあった昭和三陸津波の教訓が記された石碑を思い出しました。震災前からよく遊んでいた場所だったにも関わらず、今までそこに津波の怖さを知らせる石碑が建っていたことに全く気が付いていませんでした。碑文の中には「ここより先には家を建てるな。大きな地震の後は高台へ」と刻まれていました。

震災後に初めて、石碑の意味に気が付いたことを後悔し、「建てるだけの石碑では風景の一部になってしまう。だから、あえて雨風で朽ちる木で碑を作り、建て替えることで後世に記憶を残すしかない」

高校生と安渡古学校地区の方々で刻むメッセージを考えている風景

新たに建て替える木碑に自分たちで墨入れをする風景

と決意しました。

## 2 建立そして、初めての木碑交換

木碑の活動を始めるにあたって、以前から交流のあった安渡古（あんどふる）学校地区の方々に協力いただけないかと考え、自治会長に話をしました。一度は断られ、挫折しかけましたが、改めて想いを告げに行くと、協力してもらえることになりました。

木碑を制作するにあたり必要な木材や木工、土台建設等は、町内の業者の方々に協力を仰ぎました。直接お願いしに行き、無償でやっていただけることになりました。多くの方々の協力の元、2013 年３月 11 日、木碑は安渡古学校地区に建立されました。

そして昨年、３月 11 日には１回目の木碑の交換が行われました。この交換には私の母校の大槌高校の生徒にも参加してもらい、一緒に活動を行いました。今回は木碑の左右の側面に新たに３つの言葉を刻みました。この言葉は、「震災の１日前の自分に伝えたい言葉」です。高校生

１回目の建て替えを終えた木碑

安渡古学校地区の方々

と古学校地区の方々が３つのチームに分かれてそれぞれ考えてもらい、木碑に込められた想いはより一層大きなものとなりました。

## 3 記憶の風化を防ぐ工夫

木碑には、震災の記憶を風化させないための工夫が２つあります。１つ目はただ建てるだけでは終わらないことです。毎年３月 11 日には掃除やニスを塗る等の手入れを継続して行い、去年の取り換えには後輩である地元の高校生も交えて、地域との交流も深めました。

２つ目は、地域で活動することです。木碑に刻まれている「大きな地震が来たら戻らず高台へ」という言葉も、安渡古学校地区の方々に集まって考えてもらい、それを１つに合わせたものになっています。取り換えの際にも準備の段階から多くの人が携わっています。なので、木碑には関わる人の分だけ想いが込められています。

私の木碑への願いは、故郷の大槌町の人々やそれ以外の地域の人々が木碑を知り、関わることによって、いつかまた来るのであろう津波の際に、１人でも多くの人が生き延びることです。